氏名（本籍）	アブドサラム　アリキン ABUDOUSHALAMU ERKEN（中華人民共和国）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 154 号
学位授与年月日	2024 年 3 月 22 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	キジル壁画の画材・技術の再現について 「－第 224 窟の復元を中心に－」
論文審査委員	主　査　　教　授　　森永　昌司 委　員　　准教授　　石黒　賢一郎 委　員　　准教授　　城市　真理子 委　員　　佐藤　一郎（東北生活文化大学　学長）

論文内容の要旨

本稿は先行研究のデータに基づいて、失われたキジル壁画の絵画材料、絵画技術について再確認を行い、現状模写および復元模写について論じるものである。壁画と同様の絵画材料を用い、失われた絵画技術の再現を、東京国立博物館に収蔵されているキジル石窟第 224 窟のものと見られる壁画断片を対象に行う。

タリム盆地の各地では仏教美術が登場した。これらの中で仏教隆盛の時代に中心地だと呼ばれた古代亀茲(キジ)では仏教美術が非常に発展し、キジル、庫木吐拉(クムトラ)、克孜尔尕哈(キジルガハ)など仏教壁画群が相次いで創建された。これらの中でキジル壁画群は規模、多様化、独特性などの方面で非常に高い評価されている石窟壁画群の一つである。壁画の制作技術･技法をみると、中央アジアや中国地方の仏教壁画でも用いられたものと同じものであるが、絵画材料、絵画技術に関する史料、記録などが一切残されておらず、作者や壁画の制作技術、技法などが未だに不明であるが、前世紀 20 年代から各国でキジル壁画について、考古学、宗教学、美術史などの各方面でさまざまな研究が行われた。特に、壁画の制作技術、技法、材料学に関する研究は前世紀の 80 年代からはじめられ、21 世紀になって、中国の研究者李最雄と日本の画家佐藤一郎の研究チームが壁画の絵画材料、絵画技術の方面で多くの研究を行った。この二人が行った先行研究成果は、当時中央アジアで流行していたこの壁画技法・技術の研究でも欠かせない有力な先行研究だと言える。

本研究目的は、先行研究のデータに基づいてキジル壁画に用いられた画材と同様の画材を用い、絵画技術の再現を試みるとともに、この再現のデータを用いて東京国立博物に収蔵されているキジル壁画の断片、および他の壁画の現状模写、復元模写を行い、失われたこの技法を再現することである。しかし、再現したとしても様々な不足点があると考えられるが、研究を進めることで不足点を改善し、失われた祖先の技術を後の時代に残すことは筆者にとって非常に意味があるものだと考えている。

キジル壁画の絵画材料、絵画技術などの再現においては、筆者の現地での調査、観察などは研究の前提であるが、様々な原因で現地での調査が不可能であるため、先行研究データと併せて、日本国内で収蔵されている壁画断片について、博物館にて非接触性調査を行うとともに、主に李と佐藤の先行研究成果と比較し、本稿に必要な研究を明らかにする。それらの研究から明らかになったデータに基づいて、同様な画材、材料を用いた上で模写制作を行う。

本稿の第一章と第二章は、キジル壁画群は一体どのようなものなのかについて、そして今まで行われたキジル壁画の関する先行研究をまとめた上で、本研究の問題点と解決すべき問題点について語る。例えば、キジル壁画について述べられている書物は多く存在するが、これらの

中で最も有力なデータを探し出すことと、書物と現物を比較し、模写の前提となるキジル壁画の絵画材料、絵画技術の再現を壁画実物に近い状態で、如何に正確に再現することや、本稿で行う模写の際に昔日のものと同様な絵画材料を用いることなど、本研究では解決しなければならない問題について語る。

第三章では、壁画の材料について述べる。キジル壁画の絵画技術材料はキジル当地の環境、条件に非常に適したものであり、中央アジアの他の仏教壁画にも同様な材料が用いられ、多くの共通点がある。この点から、キジル壁画だけではなく、同時に他の壁画の先行研究を比較し、キジル壁画の支持体、地塗り、絵画層などの材料における最も正確なデータを明らかにするとともに、壁画の支持体、地塗りの重層構造の再現と、顔料製法の再現を行う。そして、東京国立博物館に収蔵されている壁画断片の現状模写を行い、再現された壁画の絵画材料、絵画技術の実用性を確かめる。

第四章では、キジル石窟第 224 窟の壁画断片と見られる東京国立博物館に収蔵されている如来像頭部の復元模写について語る。如来像頭部は頭部以外の部分がない壁画断片である。本章では如来像頭部の色彩、面相、体の動きなどの特徴を読み取り、断片のどこから切り取られた断片なのかを推定し、その窟に残っている他の壁画を参考にした上で、如来像頭部の元の姿の復元に挑戦する。

これからの計画として、本稿ではまだ不足点が多くあると考えているため、引き続き先行研究と現物を比較し、できる限り現場にて調査を行い、本稿の不足点または間違っている点を探し出していく。そして、それらの問題の改善、修正を行い、再現したキジル壁画の絵画技術、絵画材料を、昔日のものと同様なものにすることに努めていきたいと考えている。

論文審査の結果の要旨

西洋の古典技法研究は２つの方法がとられてきた。ひとつは修復家の見地から、もうひとつは、創作者による再現的な見地からによるものと考えられる。本研究は、東京国立博物館が所蔵するキジル石窟の断片の模写を中心に、古より伝わる方法論を自らの作品制作に当てはめて、宗教的な図像を１つの壁画として再現しようとするものである。キジル石窟に使われた顔料や下地材、図像の収集については、先行研究をベースに著しい成果が見られており、現在の私たちにも理解できるように、翻訳し伝えようとするかのような、たいへんユニークな研究となっている。

キジル石窟の壁画技法についての、素材研究や再現方法の提示に留まることなく、先行研究として画像資料などの整っている第 224 窟の壁画の再現を通して、顔料の組成などの化学的な分析を踏まえて、絵の具の自作などを行い、模写作品として完成されたものが提示されており、論文と提出された模写作品との整合性が評価できる。

本審査に於いては、日本語のリテラシーの不足による、論文としての完成度や、模写作品としての説得力がやや乏しいのでは？という評価も出されていたが、描画の手順や図像の配置、彩色計画などの当時の資料は何も残されておらず、欠損部分は想像力で補うしか無いことでもあり、総合的に判断して合格とした。